

研究区分	教員特別研究推進 独創・先進的研究
------	-------------------

研究テーマ	児童の尿中コチニン濃度を用いた受動喫煙評価による食生活・生活習慣との関連				
研究組織	代表者	所属・職名	食品栄養科学部・教授	氏名	桑野 稔子
	研究分担者	所属・職名	食品栄養科学部・助教	氏名	亀山 詞子
		所属・職名	京都女子大学・講師	氏名	橋本 彩子
		所属・職名	東洋大学・教授	氏名	井上 広子
		所属・職名	岐阜市保健所・所長	氏名	中村 こず枝
	発表者	所属・職名	食品栄養科学部・教授	氏名	桑野 稔子

講演題目	児童の尿中コチニン濃度を用いた受動喫煙評価による食生活・生活習慣との関連
------	--------------------------------------

**研究の目的、成果及び今後の展望**

**【背景・目的】**  
 日本では、「健康日本 21（第1次）」が始まって以降、さまざまなタバコ規制・対策が実施されてきた。受動喫煙曝露による子どもへの健康被害は多数報告されているが、子どもの食生活、生活習慣との関連について、受動喫煙の状態について客観的指標を用いて検討した研究は少ない。  
 そこで、本研究では、児童の受動喫煙の状態を尿中コチニン(UC)濃度で評価し、児童の食生活、生活習慣等の関連を詳細に検討することで、健康・栄養教育のエビデンスの構築に貢献することを目的とした。

**【方法】**  
 本学研究倫理審査委員会の承認後、G県Y市内の小学1～6年生1,296名（平均年齢8.8±0.1歳）とその保護者を対象とし、質問票と児童の早朝スポット尿採取を依頼した。その中で尿データのある942名を解析対象者とした。質問票より、身体状況、生活習慣、食習慣、精神的健康状態、受動喫煙状況を調査し、早朝スポット尿より、尿中Na、K、Cr排泄量、UC濃度を測定（ELISA法）した。UC濃度5.0 ng/mgCrをカットオフ値とし、UC低値群（<5.0 ng/mgCr）、UC高値群（≥5.0 ng/mgCr）の2群に分類後、主に二項ロジスティック回帰分析を行い、AORを算出した。統計処理はSPSS 25.0 J for windowsにて行い、有意確率は5%未満とした。

**【結果・今後の展望】**  
 家庭内に喫煙者がいる児童は、UC高値群となるAOR (adjusted odds ratio) が有意に高く、特に母親が喫煙している児童がUC高値群となるAORは、父親が喫煙している場合より高かった。また喫煙に対する意識の低い保護者の子どもは、UC高値群となるAORが有意に高かった。児童の食生活との関連について、朝食に嗜好飲料や菓子を摂る、夕食に主菜や副菜を摂らない児童は、UC高値群となるAORが有意に高かった。ファストフードを毎日食べる、食塩摂取量が多い、朝食の共食頻度が低い児童も、UC高値群となるAORが有意に高かった。また、生活習慣との関連について、起床・就寝時刻など児童の生活習慣とは関連が認められなかったものの、保護者の職業について、屋外の仕事をしている保護者の子どもはUC高値群となるAORが有意に高かった。  
 本研究結果より、喫煙者の保護者、特に子どもへの受動喫煙の影響が大きい母親に対して、受動喫煙曝露による子どもへの健康、食生活・生活習慣への影響について、積極的な教育・支援を行うことの必要性が示唆され、今後の健康・栄養教育内容の選択に有用なエビデンスとなることが期待される。